

校長室だより

共学共高

第
24
号

令和4年5月13日発行

発行責任者

白梅学園高等学校長

武内 彰

1年生の授業から～part2

5月10日（火）英語科I先生の1年1組における「英語コミュニケーションI」の授業と家庭科K先生の1年3組における「家庭基礎」の授業にお邪魔した。

I先生の授業の冒頭、生徒たちは「お願いします」と声をそろえてあいさつをする。I先生が英語で、「WORD BOX（英単語テキスト）20ページを開いてください」と伝える。今週扱う新出単語50語について、先生に続いて生徒たちが発音し、その意味を確認していく。1コマの時間に扱う英単語の数としては多いなと感じたが、I先生は一週間で50語を頭に入れるためには、1日10語ずつ学ぶのではなく、毎日50語学ぶ必要があると考えて、週の最初に50語すべてを確認しているとのことだ。生徒たちの声量が落ちてくると、I先生は「しっかり声を出して」と働きかけをする。音読できなければ、読めない、話せないとの考えに基づいている。～fulで終わる単語、例えばcareful、usefulといったまとまりもあれば、発音が全く同じで意味の異なる単語、例えばpeaceとpieceなどが出てきて、扱う単語も多様である。ひと通り確認が終わると、ペアワークである。一人が新出英単語を発音し、他の一人がその意味を答えることを繰り返す。

次に、本文の導入である。テーマは「Light from Creatures」だ。I先生がホワイトボードに4枚の写真を映し出す。そして、英語で発問をする。“There are one thing in common among these pictures.”（これらの写真の共通点がある。それは何か）また、“What are these creatures?”（これらの生き物は何か）とも投げかけた。生徒たちはペアになって話し合う。私の目の前にいるSさんの隣が空席になっているので、私が彼女とペアワークをすることにした。もっばら私は聞き役である。Sさんは、4枚の写真に共通なものは、「光る生き物であること」そして、それらは「ホタル、ホタルイカ、クラゲ、・・・」であることを答えた。さすがSさんだ。ところが、Sさんも私も4枚目の写真がわからない。海岸線にかなりの長さで青白い光が散りばめられている。そこに何がいるのかわからないのだ。後になって、それが富山湾のホタルイカ群であることがわかり、納得した。

次にI先生が“Guess the meaning of the word!”（単語の意味を推測しなさい）と投げかける。その単語とは、firefly、firefly squid、anglerfishである。ここもペアワークだ。先ほどのSさんは、「ホタル、ホタルイカ、アンコウ？」と答える。私は、「アンコウ？深海魚かも

しれないよ」と応じる。正解は、「チョウチン・アンコウ」であった。さすがSさんだ。私には高校からの学び直しが必要かもしれない。このようにして本文への導入を創意工夫していることがよくわかる。

本文をホワイトボードに映すとともに、ネイティブの音声を流し、生徒たちは聞き取りをする。その後、ペアワークで最初の段落の意味を言い合うのだ。私はSさんの和訳を聞き、「excellent!!」と応じた。

I先生の授業は、明るい雰囲気で見学しやすく英語技能を向上させる実践していることがわかるものであった。



続いてK先生の授業。被服室における「ポーチづくり」の実習である。班ごとに布を受け取り、各自のiPadを開いて着席する。その後、「お願いします」とあいさつをする。K先生が「しつけをする意味を考えてほしい。しつけがまっすぐに縫い目をそろえていないと、ミシン糸がその隣にくるのですから・・・」また、ファスナーをつけるときの留意点にも触れる。「ファスナーを閉じたときの向きがあっているか確認してください。ねじれた状態ではつけないように。両脇を縫うときは、ファスナーを中に閉じてから行ってください。」おそらく生徒たちが陥りやすいミスを防止するためにお話しされたのだろう。

その後は、各自での作業である。生徒たちは必要に応じてiPad内の動画や図を参考にしながら製作をしていく。しつけは針と糸を使って手縫いで行っている。手縫いが終わるとミシン掛けである。器用にミシンを扱っている。生徒に聞くと、小中学校でもミシンを扱ってきたそうだ。私はミシンを扱っただろうか。手縫いの記憶しかない。ジェネレーションギャップを感じる。ファスナーの付け方など、疑問のあるところは、K先生や助手のS先生に聞きながら、作業を進めていく。「難しい・・・」とつぶやく生徒もいれば、お互いに確認しながら進めていく生徒もいる。実際に作業をしながら作品を創り上げる楽しさや喜びを体感しながら、あっという間に時間が過ぎていく。そんな授業であった。そして、作業机にはアクリル板の仕切りやアルコール消毒が設置され、すぐに使わない生徒の私物はラックに置かせて、感染防止対策をしながらの実習であった。

極めて早く完成した2名の生徒に、作品の写真を撮らせてもらい、被服室を後にした。

家庭基礎やフードデザインの授業では、調理実習も行われるはずだ。実習の意義・意味を考えれば、そして教育効果を考えれば、無事に実施できることを願わずにはられない。



(共学共高とは：本校のディプロマポリシー（育てたい生徒像）の一つで、「共に学び、共に高め合う」生徒の姿を表す)